

江戸っ子だってねエ！ 神田の
生まれよ！

koberyo1

わたしが子どもだった頃の話をしてしよう。

昭和のはじめ、浪曲が毎夜のようにラジオから流れてくる時代だった。浪曲師は男性、女性を問わず、その語り調子はそれぞれの特徴があった。それぞれにオハコ（得意とするもの）があり、鬮屋の浪曲師のそれが聴きたくて、ラジオの前に釘づけになったものだ。

かずかずの浪曲師の語りのなかで、わたしは「広沢虎造（とらぞう）」の静かな語りが好きだった。三味線が全体の調子を上げてゆき、胸がわくわく熱くなったりしたし、お話にカタルシスがあってスツキリとしたものだった。

広沢虎造のオハコは「清水の次郎長」だった。清水の次郎長とは、静岡県に清水港近くに実在した侠客（強きをくじき、弱きをたすけることをモットーにした人物）で、博打打ちの大親分である。

この清水の大親分のモノガタリを広沢虎造が名セリフ、名調子で熱演するのだ。そして耳をそばだてるこちらにも前ノメりに熱狂するのだ。出だしはこうだ。

「旅～ゆけば～あ、あ。スルガあの国に～、茶の香りィィ」といった調子から入っていく。三味線の音色が物語をイキイキと誘いだし、主役をたすけながら軽快に演奏される。あの三味線の音は本当に格別なものだった。

名セリフというのは理屈ではない。何よりも語りやすく、耳になじみ、記憶に残りやすいものでなくてはならない。それはまた、大衆の心に溶け込み、愛され、生まれ育ってゆくものではないか、と思っている。

さて、浪曲師、広沢虎造の物語はこれからである。

次郎長の子分に森の石松という片目の不自由な子分がいた。この子分はバカがつくほどの正直で、実直な男なのだ。曲がったことが大嫌いなのである。ところが喧嘩っ早いというところが玉に瑕、といった性格のキャラクターでもあった。

話はこうである。この子分が次郎長の名代で旅に出るといふ。そして三百石船の船中で、石松がまず次郎長の子分であるということが強調される。

石松は、船の中である客人と対峙しているわけだが、その男の名は明かされない。し

かし、この御仁、清水の次郎長親分が大好き、ときた。で、次郎長一家のことはすべてご存知という人物で、いまでいう大の次郎長ファンである。

そこで石松は自分の素性を隠したまま、次郎長の子分の名を訊いてゆく。いつ自分の名がでてくるのを期待し、その客人に迫ってゆくのである。

ここが浪曲師、広沢虎造の名調子の場面である。

客人が、「江戸っ子だってネエ！」という。石松がすかさず、「神田の生まれよ！」と粋がる。これはサッパリとした気立てで、俺は野暮じゃねえぜ、と自負してみせるのである。

このセリフが当時、大流行りになっていて誰しもが「神田の生まれよ」ということを誇りに思った世の中であったし、家族もそのフレーズを口ぐせのように使った。

とはいえ、わたしは神田とはまったく縁もゆかりもなかったのである。しかし、それがどうだ。わたしは昭和23年に中央大学の経済に入学することになり、不思議な因縁を感じた。心底、驚いたのである。

大学生だった時期、わたしは御茶ノ水駅を中心に生活をするようになったのである。子どもの頃、塾に通い、そこでT先生の指導を受けたが、神田の三省堂書店で辞典を買った思い出の地である。

その神田の特徴をどんなところだったか、ご案内しようと思う。

御茶ノ水駅の駿河台の坂で、ときどき「ニコライ堂」という寺院から鐘の音を聴く。すがすがしい音色にしあわせの感情がよぎる。

ドント坂の下った先が神田神保町である。都電の停留所の前に古本屋が軒をつらねていて、この地の名物となっている。

三省堂の停留所前は、神田日活という映画館があり、その隣には毎日、セイロから勢いよく湯気が上がる「ニコニコまんじゅう店」である。熱々のまんじゅうを冬にふうふういいながら口に入れ、頬張る。食した常連はわたしだけではない。どれぐらいお世話になったか、語りつくせないものがある。

神田神保町から西に二、三分も歩けば、そこはもう九段下である。靖国神社の入り口には大きな鳥居が立っている。南の角は武道館。そして武道館の道は皇居のお堀の入り口となる。

話は神田神保町に戻るが、三省堂の裏が本屋の東京堂の通りになっている。東京堂の前は「モウリ」という洋食屋になっている。ここのラーメン屋は、しょうゆ味の超単純なラーメンだった。わたしは思った。安いラーメンではあるが、このシンプルな味はわたしたち学生にとっては飾りのない、良い味だ、と。

神田神保町を南下してゆくと錦町というところにでる。ここいらは「すし屋」の多いところである。ただし、「すし屋」の看板は一つとしてない。暖簾も下がっているわけでもない。

これはいったい、どういうことなのか？

答えはこうだ。ふつうの民家で「すし屋」を営んでいるのである。その「すし」の味は、まちがない、れっきとした江戸前の「すし」の味であった。ネタは新鮮で格別にうまい。

「神田の生まれよ！ 食いねエ、食いねエ、すし食いねエ！」という威勢のいいフレーズが示すとおり、「すし」は当時としては（今もなお、そうなのかもしれないが）、最高のご馳走だったのである。

また、神田は「蕎麦」がうまいことでも有名だ。白い東京ネギの香りと神田の蕎麦との取り合わせは抜群で、それは現在も変わることがない。

そして現代の神田。暖簾のかかっている店が健在だそう。となれば、この道の常連でないと行くことはかなわないのである。

神田神保町の隣は淡路町というところだが、商業簿記の専門学校が二つほどあった。なかでも大原簿記学校のことはよく記憶している。

この学校は、会計原則や簿記を勉強するのはもちろんだが、会計原則は係数処理を学ぶところではなく、人生の処世訓を勉強するのところとして有名で、現在も実在している。簿記から永遠の人生の生き方を勉強するということを知るべきである。武者小路実篤がいみじくも「わが道はこれしかない。この道でゆく」という言葉をのこしたが、

「会計道」なるものがるのを知り、それが人生の哲理にも通じているらしい、ということを知りことができたのも、ひょっとしたらきっぷのいい江戸っ子の町、神田ならではの贈りものかな、と思ったりもするのである。